

永平寺仏具と建築

Eiheiji butsugu to Kenchiku

語り手 井本雅弘

聞き手 山本真紀

企画 高山市

取材日：令和6年11月25日

大工になるまで

中学を卒業してから、多治見の職業訓練所へ大工の勉強に行きました。当時、車で多治見まで行くに、高山の駅から5時間くらいかかったね。1年間、多治見で大工の基礎を習いました。その後、西町の師匠さんのところに弟子入りしました。大工の仕事は、なかなかさせてもらえず、兄弟子の手元(注1)、掃除、材料運び、刃物研ぎ、雑用などをしていました。

その師匠さんは、今思えばありがたかったんやけど、宮大工でした。社寺建築と住宅建築の比率は、社寺のほうがちょっと多く、他では習えない特殊な仕事も覚えることができました。弟子も大勢いて、常に7人、8人くらい。師匠の家で住み込みでした。師匠の家族と一緒に生活して、こどもの守りから食事の準備までいろいろやりました。師匠は仕事はもちろん、職人の心構えなどにも大変厳しい人で、よく叱られました。

仕事で一番記憶に残ってるのは、昭和49年から50年の乗鞍の畳平にある乗鞍本宮やね。今でこそ道路がええけど、あの頃は大変な工事で2年がかりでしたよ。国分寺にも長く仕事に行ったな。高山以外では古川。遠いところでは郡上、美濃白川。みんなお寺やお宮の仕事でした。

弟子の頃に市内の大きい新築工事をさせてもらいました。その施主の親父さんが市会議員をしてみえてね、自分はその頃、弟子の中でちょっと上になってったもんやで、責任を持ってその新築工事をやらしてもらって、その親父さんにかわいがってもらったりしました。それで、どっか市内に土地を探していると話したら、売地をいくつも知ってるでって、自分を連れてまわってくれはった。そのうちの 하나가、今、会社をやっているこの場所。いろいろ迷いながらここに決めた。その時はまだ弟子の頃やもんで、長い間、土地をそのままにしとった。ここを整地したのは、独立してから。今も女房と、よう思い出して笑うんやけど、その頃、借金してもまだお金は足らんので、こどもの貯金なんかを全部使ってしまっただけ。こうして昭和60年に独立させてもらい、この場所で始めました。33歳でした。

永平寺の^{せがきだん}施餓鬼壇

師匠はいろいろなことがあって廃業されたんですよ。その時に建築書物、道具、またお客さんまでいただきました。その延長で、いまだに仕事をさせてもらっているお客さんもあります。師匠には、本当に感謝しています。永平寺の仕事の発端は、丹生川町の^{しょうそうじ}正宗寺っていうお寺様です。正宗寺の仕事も弟子の頃からずっと出入りさせてもらってました。正宗寺様が曹洞宗で、総本山が福井県にある永平寺様。

令和3年の夏ぐらいでした。正宗寺様の住職さんから「^{せがきだん}施餓鬼壇(注2)が古くなったで、また寄贈をお願いしたい」という依頼が、永平寺様からあったので相談したいって電話があったんですよ。すぐ正宗寺様へ行きました。ま



井本 雅弘

昭和28年3月25日生

プロフィール

- 昭和43年 丹生川村折敷地小・中学校卒業
- 昭和44年 県立多治見職業訓練所 修了(建築大工)
- 昭和56年 一級技能検定 合格(建築大工)
- 昭和59年 職業訓練指導員 合格(建築大工)
- 昭和60年 個人事業として創業
- 平成3年 有限会社いもと建築として法人化
- 平成19年 「匠の国・岐阜県伝統建築家」認定
- 平成29年 「飛騨高山の名匠」認定
- 令和3年 岐阜県「卓越した技能者」表彰

注1：手元とは、職人に対して補助をする者のこと。

注2：施餓鬼壇とは、餓鬼道(仏教用語・生前に悪行を働いた者や無縁仏などが落ちる世界)で苦しむ衆生に飲食を施すための供養棚。

永平寺仏具と建築

Eiheiji butsugu to Kenchiku

あ、施餓鬼壇なんてしょっちゅう作るもんじゃないので、できるかできんかっていう相談やったんですよ。自分も永平寺の施餓鬼壇を1回見たこともあったし、別のお寺の施餓鬼壇の修理をしたことがあったので、その場で「ぜひやらせてください」と返事をしましたね。その後、9月に正宗寺の住職様と同行して、永平寺様へご挨拶に行き、担当のお坊様と打ち合わせをして、令和5年10月10日納品と決定しました。その後、落慶法要(注3)までに13回、永平寺様へ行きました。

既存の施餓鬼壇には、飛騨国高山^{いな おもとたな}稲尾素縄作で、寄贈が正宗寺って書いてあったね。稲尾棟梁は、100年ほど前の名工で、丹生川出身の宮大工さん。今までに稲尾棟梁の造られた建物の修理を4棟手掛けさせてもらいましたが、実に素晴らしい仕事があり、感心するばかりでしたね。



既存の施餓鬼壇

一世一代の仕事

施餓鬼壇は開口8尺5寸(注4)、奥行6尺、高さ6尺6寸ほどの寸法です。そんなに大きいものではないです。こんだけのもんやけど、図面や材料手配やら、仕事に向かわしてもらってから、かなりの時間がかかりました。1年くらいかかったね。既存の施餓鬼壇の材料は総桧。飛騨の名工が作られた施餓鬼壇なので、飛騨の桧ってことは間違いない。飛騨桧の官材(注5)、芯去り材(注6)で材料を発注しました。材料の準備ができたのが次の年の春頃。それから木材の自然乾燥を4か月から5か月しましたね。

令和4年11月、いよいよ大工仕事へ着手しました。塔婆垣(注7)だけで58枚やったかな。今の時代、いろいろな機械があるけど、塔婆は機械では作れなんでもんで、手で一枚一枚作りました。これは大変やったで、若い者に手伝ってもらおうとしましたが、手が違うとしっかり揃ったものができなくて、並べた時に微妙なずれが出ます。やっぱり一人で作らなきゃ駄目でした。とにかく最初に塔婆を全部作りました。次に四方隅の^{とうぼがき}塔婆柱を作りましたが、これも手作りでおおかた1か月かかりましたね。

施餓鬼壇は全部春慶塗りなんです。塔婆を春慶屋へ持って行って、まず下塗りを2回してもらって、塔婆には全部墨で字を書かれるんですが、これは永平寺のお坊様が書かれる。この塔婆の並びに全部順番があるもんで、自分のほうで塔婆の順番を決めて、養生、荷造りをして永平寺様に届ける。今度はお坊様に順番を間違えんように字を書いてもらわなんのんです。間違えて書かれると、また作り直すしかない。担当のお坊様は、20日間で全部書き上げてくださった。そして、すぐ持ってきて、また春慶の塗り屋さんへ預けて、漆を11回塗って仕上げてもらいました。

それで、やっとで仕上がった塔婆を持ってきて、全部並べてみないと寸法が出せないので、塗りの厚みがあるでね。塗る前に並べてみた寸法と、塗って並べた寸法では、5分5厘、17ミリほど伸びたんですよ。やっぱりそれだけ塗った漆の厚みがあるんやね。始めからそういうことを考えたで良かったんやけど、最初の計算で作業を進めとったら、うまく収まらんとこでした。日にちの余裕もないので、1週間ほどの乾燥で素手で作業したけど、一度もかぶれませんでしたよ。



塔婆作り

注3：落慶法要とは、寺院や神社などの新築・再建・修繕・改築が完了したことを祝う仏教儀式や祝賀儀式。

注4：1尺は約30.3センチメートル。1寸は約3.03センチメートル。

注5：官材とは、国有林で採取された天然木。高級材で神社、仏閣、神棚、高級和室などに使用される。

注6：芯去り材とは、木の中心部を含まないように製材された木材。乾燥しても割れにくく、見た目が美しい。

注7：塔婆垣とは、塔婆(故人を供養するために立てる細長い木札)でつくられた囲い。

永平寺仏具と建築

Eiheiji butsugu to Kenchiku

施餓鬼壇が収まる場所は、^{ほつとう}法堂といって畳400畳の大広間。御本尊の合い向かいですね。ここの丸柱が、ざっと数えて30本。まあすごい建物ですよ。曹洞宗の建物は派手なところは全然ないね。すごい建物なんだけど、質素で、どうでも付けならん金具があるだけで、飾り金具はほとんどないやね。曹洞宗の建物は、それでまた一段と価値があると思いますね。

これ以外の部材もできた順に、塗り屋さんに預けて、順次仕上げてもらいましたね。塗り屋さんには「何年分もの漆を使ったよ」と言われました。苦勞されたと思います。自分で言うのもあれやけど、後世に残る一世一代の仕事させてもらえたなって思います。

制作秘話～苦勞したこと～

施餓鬼壇の上段の棚には、高さ1.4メートル、5尺近くある大きい^{いはい}位牌3体が安置され、下段の^{はまゆか}浜床には仏具や^{くもつ}供物が飾られます。上品に質素に見せるため、材料はわりあい細かいんですよ。これはやはり組み手（注8）の方法、技ですね。既存の仕事を何度も見に行き勉強しましたね。引出し棚の部分もよく考えてあり、同じつくりにするのに苦勞しましたよ。

そして、いよいよ組立てです。仮組みを一度しながら進めていたので、本組みはわりあい順調にできました。それでも二人で10日間かかりました。

次に永平寺様までの運搬の準備です。当初、担当のお坊様は、法堂の設置場所で組み立てるように言われましたが、それも大変ですし、経費もかかるので、全部組み立ててから運搬することにしたんです。春慶塗りは特にデリケートな塗りなので、養生するのに大変でした。運搬前に施餓鬼壇の寸法に近いコンテナトラックに積み込みました。7人で積みましたが大変でしたね。重量は量っていませんが、材料から考えると300キロはあると思いますよ。

10月10日に運搬、設置の予定でしたが、永平寺様の行事の都合で10月12日の午後に変更になりました。2日間延期したのは、ありがたかったです。細かな手直しや準備もできたでね。

当日は幸い天気も良く、トラック3台で出発しました。なるべく揺らしたくないので、金沢まわりの高速道路でゆっくり行きました。永平寺様に着いたのが、昼の12時でしたね。法堂ではほぼ行事があります。この日も午後の半日しか作業ができなので、直ちに予定の手順で作業を始めました。事前に許可をもらって、トラックは山門まで入らせていただきました。法堂は山の斜面の中腹にあり、左右が立派な登り回廊の階段なんですよ。その登り回廊が山門から法堂まで、約100メートルあるんですね。事前に距離を計って、どう運ぶかを考えとったけど、実際は考えた通りにはいかなかった。永平寺様には、常時300人以上の雲水さんと呼ばれる修行僧がみえます。結局、20人ほどの雲水さんに手伝っていただいて、無事、法堂まで施餓鬼壇を運ぶことができました。

法堂の設置場所に施餓鬼壇を据え付け、養生のサラシを片付けます。登り階段を取り付けた後、各部の点検をし、引出し床を固定しました。それから、ぼんぼりの配線をした後、点灯確認をして完了です。永平寺の副管長様にも見ていただき、受け取っていただきました。全部終わって、記念写真を撮ったのが、午後6時頃やったね。本当にありがたかった。肩の荷が一気に下りた気分でしたよ。



木材の加工



木材の加工

注8：組み手とは、木造建築において、桁や合掌梁などの部材が交差する箇所、同じ材を角度をもって接合する技法。

職人の仕事

職人の仕事とは、手先の技術でものづくりをする古来からの文化ですね。職種はさまざまですが、それぞれに昔から工夫された道具を使い、材料を用いて形にする大事な仕事やね。中でも、建築大工職は建物の基本、大元を造る中心的な職人なんですよ。

建物が完成するまでに、多くの職人の協力が必要です。大工を始め、基礎、屋根、石工、左官、電気、給水設備、外装、内装、塗装、建具、畳、指物^{さしもの}などがありますが、みんな職人の仕事なんです。

木造建築では、寸法は「尺貫法^{しゃっかんぼう}」を使っているんですよ。まだ弟子の頃、50数年前に法律で尺貫法が禁止になって、日本中の職人が大騒ぎしました。道具屋さんの大工道具の指金、定規などの目盛りが、尺や寸からメートルとセンチに変わってしまったんです。これは大変だということで、全国の職人が国に陳情してね、2、3年後に復活して「尺、寸、分、厘、毛」の寸法が公に使えることになったんですよ。木造建築、主に社寺や大形古民家などには、古くからの定事^{さだまりごと}があります。勾配や角度、木割^{きわり}（注9）の計算などは尺や寸じゃないとしづらいんですよ。

職人の仕事は派手な仕事ではないけど、長い歴史がある大切な貴重な仕事だと思っています。

技をつなぐ

私は田舎生まれ、田舎育ちです。物心がついた頃から自分の家に、渡り職人の石工さんが家族で住んでいたんですよ。その職人さんは、地域の石屋さんとして暮らしていました。今でもその仕事は多く残っています。家々の屋敷^{やしき}の石積み、建物の基礎石、大きくて立派なものでは、神社の社号石と手水石、お寺の山号石と石段などがあります。社号石や山号石には職人の名前も彫ってあります。機械もトラックもなかった時代に石だけでこれだけの細工をされたことに感心します。

家には、石臼があります。この石臼を作られたのは、私が小さかった頃ですけど、よく覚えていますよ。材料の石は在所の石切場からそりに乗せ、牛に曳かせてきたらしいですね。石臼は食べるものを作る道具なので、鉢はもちろん全体もなめらかに磨いてあり、形もバランスも良く本物の職人の仕事ですね。

私が中学生の時でしたが、家の改修工事に地元の大工さんが弟子を一人連れて入られました。大工さんの工事を見ているのが、本当に楽しくて、学校が終わるとすぐに帰ってきて、大工さんの仕事を見ていました。その大工さんは弟子には厳しかったけど、話の上手な人でね、「大工は算数が大事だぞ」とか「どんな仕事でも辛抱が一番やな」なんて言われたのをよく覚えています。大工の道に進んだのもこの大工さんの影響かなと思います。こどもの頃から職人さんのものづくりに興味を持っていたんですよ。

その頃から60年で、なにもかもまったく変わってしまって、私どもはついていけないね。建築も大工仕事もそうです。コンピューターで家を建てる時代やからね。自社では、社寺関係や古民家を主にやっていますが、建築基準法が



完成した施餓鬼壇

注9：木割とは、木造建築において、各部材の寸法を比例関係で決めるシステム。

永平寺仏具と建築

Eiheiji butsugu to Kenchiku

厳しくて、施主さんの希望に応えられないこともあるんですよ。

職人や弟子を雇うにも、雇用関係の法律がいろいろあって大変なんです。しかし、今まで師匠や先人に習って続けてきた技術を、後世に伝え続けていくことがとても重要です。すでに廃れた技術もあります。これは時代の流れで、残念ながらどうしようもない。本当に貴重な技術は、技の伝承のため、建物の建て替えや復元がなされているんですよ。

うちでは常に大工見習いの募集をしています。時々、面接や実習の希望があるので、その都度受け入れています。ですが、なかなか採用には至りませんね。今はこちらで選ぶじゃなく、向こうが決めるんですよ。大半が転職の子でね、建築や大工職を真剣に考えてくる子は少ないですね。それでも採用が決まれば、従業員として法的な手続きをして大工見習いとして雇い、一から根気に教え育てていくんですよ。大変ですよ。一通りできるようになるのに5年から10年かかります。今いる見習いの子は3年目ですが、真面目に頑張っていますね。大工は高所作業も多く、また刃物を常に使う危険で怪我の多い職種なので、就職して怪我で退職した子もいました。かわいそうでしたよ。

私も高齢になってきたので、頑張れるうちに一人でも多くの良い職人を育て、伝統建築を伝えておきたいと強く願っています。